

# 史跡整備活用ワークショップの試み

—国史跡・中須東原遺跡を事例として—

石川 慎 治

人間文化学部 地域文化学科 准教授

## 1 はじめに

昭和25年(1950)に施行された文化財保護法によれば、文化財の保護は保存と活用からなり、保存と活用は相互に補完しあうものであることが示されている<sup>1)</sup>。しかし、国宝・重要文化財に指定されている建造物においては、当初、保存に対する取り組みに重きが置かれていたため、活用に関する取り組みが活発になってきたのは、最近のことといえよう。文化財保護法によって定められている史跡においても同様であり、史跡の活用についても、現在、様々な取り組みが行われている状況である。

一般に、史跡等<sup>2)</sup>の活用については、来訪者に対して史跡等を適切に公開することをはじめ、来訪者が史跡等の空間において快適に過ごし歴史及び文化を学ぶことができるように諸施設の設置を行うこと、公開・活用に関する企画の立案及び宣伝、学習のための教材の製作及び場所の準備を行うことなど、物理的、精神的な面にわたる各種の施策が広く

含まれている。また、これに関連して、史跡等の運営及び史跡等を核とするまちづくり・地域づくりをはじめ、これらに関わる地域連携の促進及び市民活動への支援等の施策がある<sup>3)</sup>(図1)。ただし、このような形で史跡が良好に活用されるためには、史跡に対する地元住民の理解が必要不可欠である。そのため、一般的には、史跡に関する博物館・資料館を設置したり、講演会・見学会の開催などを行ったりするが、博物館や資料館といった施設の整備には多額の資金が必要になるため容易ではないし、講演会・見学会の参加者は歴史に興味のある大人のみであることが多いため、史跡に関する理解が思うように広がらない。

このような状況の中、地元住民が史跡に関する理解を深めていくためには、子どもの頃から日常の学習の中で史跡について触れ、理解を深めてもらうような仕組みづくりが重要となる。これに対し、学校教育で史跡を活用する取り組みが各地で模索されているが、自治体の文化財担当職員が地元の小中学校

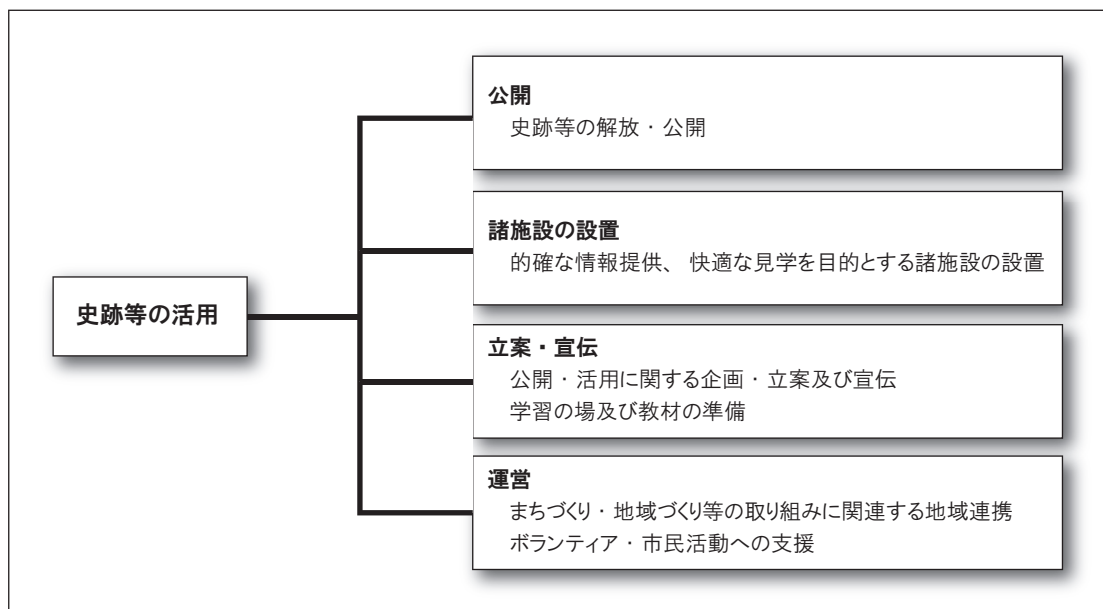


図1 史跡等の活用<sup>4)</sup>



中須東原遺跡は、益田市内を流れる益田川・高津川の河口域で発見され、広さ約40,000㎡もある中世の湊町の遺跡である(図3、写真1・2)。この遺跡は、全国的にも数少ない礫敷き等の港湾遺構や、港を中心にした町の街区が良好に残る港湾遺跡として、平成26年(2014)に、国の史跡に指定された。その後、中須東原遺跡の適切な保存管理を図り、さらに整備活用を推進することを目的とした「史跡中須東原遺跡保存活用計画書」、また、今後の遺跡の整備活用における方向性・将来的な活用ビジョンを示す「史跡中須東原遺跡整備基本計画書」が策定されている。しかし、ここで取り上げられているのは、史跡におけるハード面での整備活用に関するものが多く、ソフト面での活用はやや薄い印象を覚える。また、個人的には、中須東原遺跡は中世の港湾遺跡ということもあり、従来型の保存整備によって観光に結び付けるようなやり方には馴染みにくいと思われた。全国的にも珍しい港跡が発見されたとはいえ、通常は遺跡の遺構面保護のために、埋め戻してその上に整備を行うので、観光客に本物を見てもらうことは厳しい。また、遺跡を紹介するための施

設整備についても、他の市町村と同じく財政上の問題があり、すぐに実現する可能性も低い。そのようなこともあり、中須東原遺跡を有効に活用していくためには、従来型とは異なる方向性が必要と思われる。

## 2-2 中須東原遺跡整備活用ワークショップ

前述のような背景の中、筆者は益田市教育委員会から中須東原遺跡の整備活用ワークショップ(以下、ワークショップとする)を依頼されたが、打ち合わせの中で、「まず地元の人に遺跡の価値を知ってもらうことが必要。遺跡を使った学習が学校教育の中で継続できれば、①子どものころから遺跡への理解が深まる、②その子供たちの中から「歴史を活かしたまちづくり」を担う人材を育成できる。結果として、遺跡の整備活用につながるのでは。」となった。

そこで、ワークショップでは、益田市内にある小中学校の教員に参加いただき、中須東原遺跡を学校教育に取り入れる方法を考えることとなった。また、今回の取り組みでは、主に中須東原遺跡を題材としているが、他の文化財を学校教育に取り入れる場合にも応用がきく方法を検討することとした。なお、このワークショップは、益田市教育研究会の社会科部会・教職員連携研修の社会部会・平成26年度第2回ふるさと益田見学ツアーも兼ねることとなった。最終的に、このワークショップに参加した教員は19名(小学校教員:8名、中学校教員:11名)となった。

当日のプログラムは、表1の通りである。詳細な内容については、以下、紹介することとする。

### 2-2-1 プログラム① 中須東原遺跡の説明 今回のワークショップの主要な目的は、中須東



写真1 中須東原遺跡・全景<sup>7)</sup>



写真2 中須東原遺跡の礫敷き遺構<sup>7)</sup>

表1 ワークショップのプログラム

13:00 - 13:10	集合・挨拶
13:10 - 14:10	プログラム① 中須東原遺跡の説明
14:20 - 16:15	プログラム② ワークショップ
14:20 - 14:45	他地域の小学校の取り組み事例紹介
14:45 - 15:45	グループワーク
15:45 - 16:15	発表および講評
16:15 - 16:20	閉会・挨拶

原遺跡を題材として授業案を考えてもらうことになっているが、まず、その題材となる中須東原遺跡を小中学校の教員に知ってもらうために、益田市教育委員会の文化財課職員（以下、文化財課職員とする）によって、中須東原遺跡の概要についての説明が行われた。なお、当初は、現地で説明が行われる予定であったが、雨天のために、急遽、現地にも近く、ワークショップ会場である益田市水質管理センター・会議室にてパワーポイントなどを用いた説明となった（写真3）。

中須東原遺跡の説明では、これまでの各種調査の成果を中心に行われたが、その際に、授業案を考える上で活用できそうな資料（中須東原遺跡復元図、昭和22年の空中写真、出土遺物（写真4）、益田川下流域の字分布図、「益田部中須村地引図」、「中須東原遺跡」（編集・発行／益田市・益田市教育委員会、写真5）、『益田の歴史・中世編 中世の益田を歩いてみよう』（編集・発行／益田市教育委員会、写真6）、など）が遺跡の説明に用いられた。

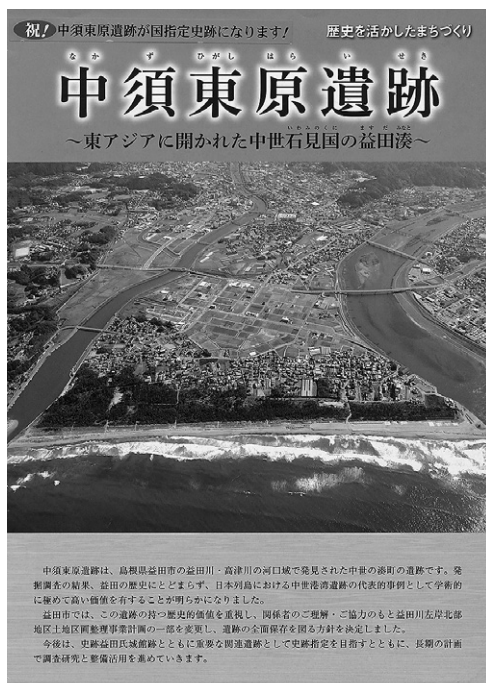


写真5 『中須東原遺跡』



写真3 プログラム①・遺跡の説明



写真4 プログラム①・遺物の展示

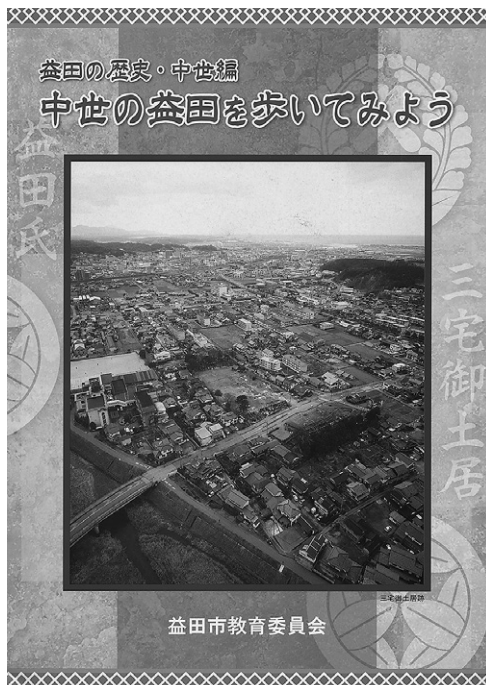


写真6 「中世の益田を歩いてみよう」

2-2-2 プログラム② ワークショップ

まず、筆者から、史跡を活用して学校教育に取り入れている他地域の事例として、滋賀県彦根市立城西小学校の取り組み(「彦根市立城西小学校の取り組み 一彦根城・ちびっこガイドー」)を紹介した。城西小学校では、4年生の総合学習において、国特別史跡・彦根城跡を題材に、複数のグループに分かれて事前学習した内容を観光客に説明している。この説明では、自分たちでプレゼンボードを作り、グループ内の児童が協力して説明を行っており、地域の文化財や歴史を理解するのに役立っていると指摘した。また、観光客も児童の説明に熱心に耳を傾けているため、市のPRにもなるし、児童のやりがいにも大きな影響を及ぼしていることを挙げ、このあとのグループワークの手掛かりになるようにした。

次に、グループワークでは、中須東原遺跡の説明や他校での事例紹介をふまえて、参加者を4グループに分け、中須東原遺跡を題材とした授業案を考えてもらうことになった。授業案については、「社会」、あるいは「総合的な学習の時間」の1回分の授業を想定してもらった。



写真7 プログラム②・グループワーク



写真8 プログラム②・発表

表2 グループワークの成果

Aグループ	
タイトル	「益田の国指定の史跡を知ろう」
テーマ	中世の港の姿
流れ	①中世の湊のイラストから、気づいたことや疑問に思ったことを話し合う。 ②「どこか」「いつの時代か」について、話し合う。 ③湊跡で発掘された遺物を知る。 ④「だれか」交易をさせているのかを話し合う。 ⑤全国でも最大規模であることを知り、「全国にPRしよう」という学習課題を持つ。
Bグループ	
タイトル	「世界とつながる益田」
テーマ	中世の交易・交流
流れ	①出土品から考える(文化財課職員)。 ②海洋領主・益田氏について考える(益田氏はなぜ交易に力を入れたのか)。 ③まとめ(益田は文化的にも経済的にも豊かであったことを紹介する=文化財課職員) ④感想・気づきを書く。
Cグループ	
タイトル	「益田平野の地形の変遷 ～中須港と今市港から考える～」
テーマ	中世の地形の変化
流れ	①現代の航空写真(H12)に、港をプロットしたものを見せる→どっちの港(中須港、今市港)が古いか? ②鎌倉時代の地図に港をプロットしたものを見せる(ヒント:縄文・弥生時代の地図)→なぜ中須から今市へ港が移ったか?
Dグループ	
タイトル	「益田氏と中世の交易」
テーマ	中世の交易・交流
流れ	①毛利氏への贈り物→昆布を切り口(どこで獲れる?なぜ、益田氏が昆布?) ②元祥の絵から気づくこと(トラの皮→益田に虎がいた?→その他の遺物→ベトナム・タイ中国から) ③遺跡のイラスト→日本だけでなく、アジアをつなぐ広域ネットワーク。 ④なぜ、益田氏はそれだけの力を持つことができたのか?

まず、グループ分けについては、小学校と中学校では教育内容が異なるために、小学校教員：AとCグループ、中学校教員：BとDグループ、に分けた。また、各グループには文化財課職員が一人ずつ入り、授業案作成をサポートした(写真7)。その後、各グループは、最初に指定されたテーマにしたがい、中須東原遺跡の説明やそこで紹介された資料などをもとに考え、表2のような授業案を発表した(写真8)。

各グループの発表後、事前に配布した投票用紙に、「一番良かったと思われるグループ」「コメント(良かった点・改善点など)」を記入してもらって回収したが、投票については、自分以外のグループに投票することとした。投票については、AグループとDグループに票が集まったが、Aグループについては、「歴史的な内容を踏まえつつ、全国にPRする課題につなげることで、自主的・発展的な学習につなげていこうとした点が良い」といった意見が多く、Dグループについては、「毛利氏への贈り物(昆布・虎の皮など)から学習を広げて中世の交易・交流を学び、あわせて中須東原遺跡の価値も知ることができる点が良い」といった意見が多数を占めていた。

### 2-3 ワークショップを終えて

今回、このワークショップにおいて、当初の二つの目標はある程度達成できたように思う。

まず一つ目は、とにかく「遺跡のことを教員に知ってもらう」ことである。地域の文化遺産を小中学校の学習プログラムに組み込むためには、教員自身が文化財関係者から直接情報を得てもらうことが必要と考える。文化財関係者が生徒に講義を行うやり方もあるが、どうしても専門用語を使いながらの説明になってしまい、生徒たちにはうまく伝わらない場合が多いように思われる。効率的ではないが、文化財関係者から得た情報を、教員が分かりやすく伝える形が生徒にとっては最善であると思われる。そのような意味では、グループワークに入る前に中須東原遺跡の説明をしっかりと聞いてもらう場を提供できたことは大きいと考えている。

次に、二つ目は、教員と文化財関係者(今回の場合は文化財課職員)がつながるきっかけづくりの場を設けることができた点である。グループワーク時に各グループに文化財課職員を入れたのは、授業案

を考えると専門家としての視点でサポートをつとめてもらうばかりでなく、その後の人間関係を形成するうえでのきっかけづくりとしての側面もある。

この二つの目標の達成により、後日、素晴らしい取り組みが行われた。それは、今回のワークショップでの取り組みをもとに、平成27年(2015)2月、益田市立益田中学校・山本悦生先生(当時)によって、中須東原遺跡を取り上げた社会科の授業が行われたことである。このことは、地元新聞でも取り上げられ<sup>8)</sup>、反響は大きなものだったが、この授業を行う上で、山本先生はワークショップ後も個人的に中世の益田のことを調べたり、ワークショップのグループワークでサポートしていた文化財課職員に協力してもらったりして、中世の益田の交易・交流に関する授業を行ったと聞いている。なお、この授業の取り組みに関しては、「地域教材を取り入れた歴史学習の試み—益田氏の姿を通して中世の時代像をとらえる—」というタイトルで『島根の教育研究と実践 第15集』(日本教育公務員弘済会島根支部、P.25-28、2016年)に掲載され、平成27年度教育実践研究論文の特選を受賞された。

### 3 さいごに

中須東原遺跡を対象とした今回の史跡整備活用ワークショップの成果が、実際に中学校での授業に繋がり、良い成果が出てきたと感じている。

一方で、反省すべき点も見えてきた。一つは、グループワークの時間が少々短かったことが挙げられる。グループワーク後のコメントにおいても「もう少し時間を取ってグループワークをしたほうがよい」という意見があった。

また、ワークショップ自体ではないが、参加教員がワークショップ後、本格的に授業案を考えるときのサポート体制のあり方である。前述の山本先生の場合も、ワークショップ後に、個人でいろいろと勉強されて授業を練られたと聞いており、実際に地域の文化遺産を授業に取り入れるためには、現在、個人のがんばりに期待するしかない状況であるといえよう。ワークショップ後の部分で、文化財課、あるいは教育委員会のサポートが必要と思われた。今後はワークショップばかりでなく、フォローできるような仕組み・体制作りを考えていく必要を感じた。

今後の展開としては、市内にある別の遺跡を対象として、同様のワークショップを定期的に開催することである。また、すでにワークショップを行った中須東原遺跡においても、今後予定されている発掘調査が進めば新たな成果が出てくる可能性がある。その場合、その成果を反映した形で新たな授業づくりが必要となると思われる（なお、平成28年(2016)8月に、史跡整備活用ワークショップの第二弾として、市内にある国史跡・益田氏城館跡を題材に、ワークショップを開催することができたが、これについては、別の機会に発表したいと思う）。

最後に、中世の文化遺産が多い益田市においては、「歴史を活かしたまちづくり」のため、「歴史を活かした人づくり」(＝教育)が中須東原遺跡、ひいては益田市のために必要であると思うが、これは全国の史跡に当てはまるといえよう。人づくりは成果が見えてくるまでに時間がかかるが、今後もこのような取り組みが継続的に行われることを願うばかりである。

#### 〈註〉

- 1) 『史跡等整備のてびき —保存と活用のために— I 総説編・資料編』、P.60。
- 2) ここでは、史跡・名勝・天然記念物のこととする。
- 3) 『史跡等整備のてびき —保存と活用のために— I 総説編・資料編』、PP.61-62。
- 4) 『史跡等整備のてびき —保存と活用のために— I 総説編・資料編』、P.61を修正。
- 5) 「学校教育における埋蔵文化財の活用に関する研究」、P. 8を修正。
- 6) 『中須東原遺跡』(パンフレット)内の図を加筆修正。
- 7) 『中須東原遺跡』(パンフレット)を転載。
- 8) 山陰中央新報(朝刊)2015年2月14日記事。

#### 〈参考文献〉

- ・滋賀県立大学人間文化学部・石川研究室+益田市教育委員会文化財課編：『史跡中須東原遺跡活用ワークショップ活動報告書』、益田市教育委員会文化財課、2014年
- ・文化庁文化財部記念物課監修：『史跡等整備のてびき —保存と活用のために—』(I～IV)、同成社、

2005

- ・山本悦生：「地域教材を取り入れた歴史学習の試み—益田氏の姿を通して中世の時代像をとらえる—」『島根の教育研究と実践 第15集』、日本教育公務員弘済会島根支部、PP.25-28、2016年
- ・ランドブレイン編：『史跡等・重要文化的景観マネジメント支援事業報告書』、文化庁文化財部記念物課、2015年
- ・渡邊稔・益川浩一・森田政裕：「学校教育における埋蔵文化財の活用に関する研究」『岐阜大学総合情報メディアセンター 生涯学習システム開発研究 第6巻』、岐阜大学、PP.1-14、2008年